氏　　名	魏　娜
学 位 の 種 類	博士（　国際日本研究　）
学 位 記 番 号	博　甲　第　　8326　　号
学位授与年月日	平成　29 年　7 月　25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	中国語を母語とする日本語学習者の漢字語彙力の研究 ―音声からの意味理解力を中心に―

主　　査	筑波大学　教　授		加納　千恵子
副　　査	筑波大学　教　授		酒井　たか子
副　　査	筑波大学　教　授	Ph. D（言語学）	今井　新悟
副　　査	筑波大学　准教授	博士（工学）	崔　宰栄

論　文　の　要　旨

本論文は、日本語教育の立場から、日本語と中国語における漢字語彙の類似性について再整理するとともに、中国語を母語とする日本語学習者（以下、CNS とする）の漢字語彙力について、主に音声からの漢字語彙の意味理解という側面に重点を置いて調査及び分析を行ったものである。音声による漢字語彙テストを行ってCNS による漢字語彙の音声情報の利用状況を探ること、日中の漢字語彙の類似性が音声からの語彙の意味理解にどのような影響を与えるかを解明することを主な目的としている。本論文は 7 つの章から構成されている。

第 1 章　研究の背景と目的

第 2 章　先行研究

第 3 章　日本語と中国語の漢字語彙の音声的類似度および意味的類似性

第 4 章　CNS による音声情報の利用

第 5 章　日中の漢字語彙の類似性と音声からの漢字語彙の意味理解力

第 6 章　漢字語彙音声テストの問題項目の分析

第 7 章　本論文のまとめと今後の課題

第 1 章では、日中両言語で使われている漢字語彙の発音及び意味の共通性と相違性に関する研究背景と問題の所在を述べた上で、CNS の日本語学習において、漢字語彙の共通性は文字による理解を促進する傾向にはあるが、音声による理解にはマイナスに働く場合もあることを指摘し、3 つの研究課題を設けている。

課題 1）旧日本語能力試験（JLPT）の 1 級・2 級の使用頻度 の高い 2 字漢字語彙（音読み語）について、日本語と中国語の発音及び意味の類似性を整理し、考察する。

課題 2）CNS が日本語の漢字語彙の音声をどのように意味理解の手がかりとして利用しているのかを日本語能力レベル別に検討する。

課題 3）日本語能力のレベルが異なる CNS を対象に、音声を用いた日本語の漢字語彙力テストを実施し、その意味理解における日中の漢字語彙の音声的類似度及び意味的類似性の影響を探る。

第 2 章では、日中の漢字語彙の類似性を検討した先行研究に加え、日本語教育、認知心理学分野における CNS による漢字語彙の習得及び処理過程に関する研究、漢字語彙力の評価に関する研究などを整理し、その成果と問題点を検討している。日中同形同義語など、漢字語彙の形態的類似性や意味的類似性を扱った研究は数多くあるのに対して、音声的な類似性を扱った研究はまだ限られており、CNS による漢字語彙の音声情報の処理に関する研究、特にテストを用いた研究は数が少ないことを指摘している。

第 3 章では、日中両言語において漢字語彙がどの程度音声的及び意味的に類似しているかを検討している。JLPT の 1 級及び 2 級の出題語彙の中にある 2 字漢字語彙（音読み語）計 3129 語を、使用頻度によって 3 つに分類し、頻度が 10,001～300,000 の 670 語を高頻度語とした。その中から日中両言語に存在する漢字語彙 120 語（調査 1）と 330 語（調査 2）、合計 380 語（異なり語）を抽出し、CNS がその日本語の発音と中国語の発音を耳で聞いた際にどれほど似ていると感じるのかを 7 段階の尺度で評定させた平均値を「音声的類似度」と定めている。音声的類似度の平均は調査 1、2 ともに 3.4 であったが、日本語レベルが高い CNS は音声的類似度の評定値が高いことが確認された。次に、日中の漢字語彙の意味的類似性について「日=中」、「日⊃中」、「日⊂中」、「日∩中」、「日」、「日≠中」という 6 類に分けて検討した。

第 4 章では、漢字語彙テストにおける初級、中級、上級の CNS の音声情報の利用状況を明らかにするために、文字情報だけのテスト（無音 KSPOT）と、同じ内容で文字と音声が同時に与えられるテスト（有音 KSPOT）の 2 つの調査を行っている（調査 3）。その結果、無音 KSPOT は平均得点が 30 点満点中 15.2 点、有音 KSPOT は 18.4 点で、CNS は文字ばかりでなく、音声も利用していることが確認できたと述べられている。

第 5 章では、音声による漢字語彙テスト（調査４、調査５）を実施し、日中の漢字語彙の音声的類似度及び意味的類似性の影響を分析、考察した結果、音声的類似度とテストの得点との関係は確認できなかったが、意味的類似性とテストの得点との関係については、有意水準 5%で検定した結果、全体的に 6 つの語類の間には得点の有意差が認められなかった（p=.092）ものの、CNS の日本語レベル別に検討した結果、上位群において日中の意味的類似性によるテスト得点の差が有意に認められ（p=.015）、「日=中」類と「日⊃中」類の間にも有意差が確認できた（p=.004）。また、いずれのレベルにおいても、日中同形同義語が他の類の語よりテストの正答率が低かったことが報告されている。これについて、邱(2002)の視覚呈示による漢字語彙の処理経路を援用し、日中同形同義語とそれ以外の語の音声による漢字語彙の処理経路の仮説の説明が試みられている。

第 6 章では、CNS がテストでどのような解答をしたかを質的に検討するため、第 5 章の調査 4、調査 5 の共通テスト項目の中から正答率が低かった項目（全体正答率 60%以下）について分析を行っている。正答以外の選択肢の特徴を客観化するため、正答との読みの類似性、意味の類似性、中国語で文脈に適合するかという 3 つの観点から分析した結果、全体的にみると、正答と読みが同音あるいは類音の選択肢が多く選ばれ、間違いやすいことが明らかにされている。日本語のレベル別に見ると、上位群は音声と文脈を総合的に利用して解答する傾向が見られたのに対して、下位群と中位群は正答と読みが同音あるいは類音の選択肢を多く選んでおり、音声に頼って解答する傾向が見られたとされ、日本語のレベルが高くなるとともに、音声情報の処理がボトムアップ処理からトップダウン処理へ変わることも示唆されている。特に正答率の低かった日中同形同義語類について音声からの漢字語彙の処理経路の仮説により説明を試みた結果、同じ語類であっても誤答の傾向が異なる場合があり、文脈の難易度、選択肢、既習語や未習語の影響等も考えられるため、処理経路だけでは CNS の解答を十分に説明できないことが示されている。

第 7 章では、本論文の各章の研究、調査の結果をまとめ、設定した 3 つの課題について本論文で明らかにできたこととその主張がまとめられている。また、研究の成果と意義、今後の課題についても述べられている。

審　査　の　要　旨

1　批評

本論文は、中国語を母語とする日本語学習者（CNS）の漢字語彙力について、主に音声からの漢字語彙の意味理解力を中心に、音声を利用した漢字語彙テストを用いて調査し、CNS による漢字語彙の音声情報の利用の仕方の解明を試みたものである。従来日本語教育において、CNS は母語である中国語と日本語との間に共通して存在する漢字語彙知識のゆえに日本語の読み書きの学習に有利であるとされているが、一方、音声の聞き取りには困難を抱えているという現状について、未だに効果的な解決策が講じられているとは言い難い。本論文は、CNS の漢字語彙力を、従来のような文字による読み書きに限定して考えるのではなく、音声の聞き取りにも拡張して考えるべきであると主張している。具体的には、音声を用いた漢字語彙テストを考案、実施し、漢字語彙の音声情報が CNS によってどのように利用されているかを解明することにより、CNS が苦手とする聴解における漢字語彙教育の改善を目指すところに特色があり、日本語教育の現場に資する研究であると評価できる。日中の漢字語彙を形態的・意味的な類似性によって分類する先行研究は数多くあるが、音声的な類似性について取り上げ、CNS が日本語と中国語を実際に耳で聞いた際にどの程度似ていると感じるかを評定する調査を行い、その平均値を「音声的類似度」として数値化したことは、基礎研究として貴重なデータである。しかしながら、調査協力者が中上級者に限られていたことは評定値の一般化に課題を残しており、今後、初級や日本語学習経験のない中国語母語話者にも同様の調査を行う必要があろう。

4 章で扱った調査は、同じ内容で文字のみのテストと、文字と音声の両方のテストとの結果の比較という点で非常に興味深い試みである。さらに音声のみのテストを行った場合どうなるかという調査計画になっていれば、より有意義であろうと考えられる。また、5 章、6 章で扱った漢字語彙音声テストは、漢字語彙の意味的類似性の影響をみるのには一定の成果があったが、音声的類似度の影響をみるためには、調査用語彙の統制が十分でなかったことが不足点として挙げられる。

本論文で課題 1 として、JLPT の 1 級と 2 級の 2 字漢字語彙のうち使用頻度の高い 380 語について、日中の漢字語彙の音声的類似度および意味的類似性を含む 7 つの情報からなる漢字語彙の基礎データ表を作成できたことは、中上級の CNS を対象とする日本語教育のための基礎資料として有用なものであると評価できる。また、課題 2 と 3 を検討するために作成された、音声を利用した漢字語彙テストの形式は、従来の文字による漢字語彙テストだけでは測れない、音声からの語彙の意味理解力をみるためのテストとして活用されることが期待でき、日本語教育の現場に応用できる成果であると考えられる。

本論文は、中国語を母語とする日本語学習者の漢字語彙力を音声的な側面に注目して分析考察したという点において、研究と教育現場をつなぐ実践的、実用的なテスト研究として一定の価値を持つものであり、さらなる継続と発展が期待される研究である。

2　最終試験

平成 29 年 5 月 22 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員会全員一致で合格と判定された。

3　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（国際日本研究）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。